

標準化・高品位印刷・デジタルワークフローの 実現をサポートする EPSON「MAXART PX-H10000/PX-H8000」

(株)リョーインは三菱重工グループとして関連製品(自動車、飛行機、船、重機等)のカタログや、PL法を意識した取扱説明書作成、オンデマンドプリンティングなど、ユーザーニーズに合った各種印刷物製作を行っている。CTP導入時からDDCPとしてMAXARTを導入し、色の標準化、高品位印刷、デジタルワークフローに「MAXART PX-H10000/PX-H8000」を有効活用している。

EPSON「MAXARTシリーズ」 との出会い～現在まで

リョーインとMAXARTとの関わりはCTP導入時期にさかのぼる。CTP導入に伴い色校正のデジタル化が必要となり、様々な方式のDDCPを一時的に導入、テストを行っていたが、インクジェット(以下、IJ)プリンター以外ではコスト面での折り合いがつかず、またDDCPとしての要求品質にあてはまるIJプリンターはほかにはなく、EPSON「MAXARTシリーズ」の採用となった。以来MAXARTに信頼を置き、歴代のMAXARTシリーズを使い続けており、現在では新たに導入した「PX-H10000」をメインに色校正を実施している。



清藤信一氏
(株)リョーイン
印刷事業部 東京工場 エキスパート
アナログからデジタルまで一貫したCMSを実践している。印刷機もデジタルに噛み砕いて管理。

「PX-H10000」は、体感出力スピードではこれまで使用していたPX-10000と比較して3割程度向上し、またロール紙の交換がスピンドルレスとなり、現場の作業性も向上。自動測色器による夜間の自動キャリブレーションは、管理の手間が大幅に軽減できる。これらの点から、同社では「PX-H10000」を高く評価している。

標準化を徹底し高品位印刷を 競争力に

昨今の受注確保さえ厳しい印刷業界において、グループ会社以外の仕事の比率も大きくしていく方向性のなか、競争力の向上、他社との差別化の武器として、色の標準化を徹底し「高品位印刷」への取り組みを進めている。リョーインでの高品位印刷とは、高精細印刷と広色域印刷を指している。高精細印刷では、一般的な高精細の線数である280線をはるかに超え、370線を実現。既に一部の自動車カタログでは実際にFMスクリーン(15 μ m)にて印刷している。自動車のメタリック塗装などの微細な印刷表現が要求される分野において、高精細印刷がもたらす効果は大きいはずだ。

広色域印刷では、東洋インキの広演色枚葉プロセスインキ「Kaleido(カレイド)」によるKaleido印刷に取り組み、Kaleidoプロファイルに準拠した印刷を実現。その色認証も取

得している。自動車のマイナーチェンジで新色が出た場合、ブルーやグリーンが一押しカラーだとしたら、これまでは通常のプロセス(4色)印刷で色が再現しきれず、印刷会社の営業担当者は頭を抱えたが、KaleidoならRGBの色を忠実に再現できるのだ。これら高品位印刷を競争力とし、高い品質が要求されるカタログ印刷もKaleido印刷の実績がある。

一方、高品位印刷を安定的かつ効率的に実施するために色の標準化は欠かせないが、変動要素が多い印刷機の管理は簡単ではない。認証制度の策定が進むジャパンカラーも、認証制度を先行して実施するKaleidoも、色の規格は測色値=デジタルであるが、印刷機の管理はアナログである。そこで色の規格を「色見本」というアナログへ置き換えるアウトプットデバイスとして「PX-H10000」が活用されている。MAXARTから出力される信頼性の高い色見本は、色を数値管理する技術担当者と印刷機をハンドリングする機長の共通の指標となり、標準化の取り組みを支えている。

効率的・先進的な デジタルワークフローを構築

リョーインでは高品位印刷を競争力にするとともに、デジタルワークフローによる効率化も積極的に推進している。CTP導入当初より

(株)リョーイン (印刷事業部)

住所 東京都荒川区町屋1丁目38番16号
URL: <http://www.ryoin.co.jp>



成瀬暢一 氏
(株)リョーイン
印刷事業部 東京工場直属
清藤氏とともにリョーインのCMSを担う。次世代の
リョーインのCMSリーダー。

色の標準化を念頭に置き、いち早くプロフィールメーカー、測色器を導入し自社の印刷機のプロファイルを作成、DDCP運用を行ってきたが、精度の高い管理が必要な高品位印刷の色校正においては、まずは本機校正からスタート。高精細印刷、広色域印刷のノウハウを蓄えた後「PX-H10000」の導入により効率的なDDCP運用を実現した。特に広色域印刷のDDCPにおいては、色見本の色域が狭い場合、印刷はそのポテンシャルを發揮しきれず「宝の持ちぐされ」となってしまうのだが、「PX-H10000」の再現領域の広さにより、Kaleidoの持つクオリティを最大限に引き出すことにも成功している[図]。広色域印刷とPX-H10000のペアは、お互いの最高水準を出し合っカラーマネジメントができるという最高の組み合わせなのである。またさらなる効率化として「PX-H8000」を品川の営業部へ導入し、先進的なリモートブルーフを実現している。東京(町屋)の印刷事業部の「PX-H10000」と同じ色が出力可能で、自動測色器により技術者が常駐しない

営業拠点でもプリンターのメンテナンスは問題ない。今まで色校正の受け渡しには、社内の定期便で半日から1日かかっていたが、プリンターの出力時間だけとなったのは画期的である。「PX-H10000/PX-H8000」の導入、自動測色器の活用により、スピーディー、タイムリーな色校正提出が可能となり、効率化=競争力の向上にもつなげていけるのだ。昨年12月には名古屋の印刷事業部にも導入しており、東京での印刷との色合わせを行い、社内の標準化も推進している。

今後の取り組み

リョーインでは、高品位印刷がDDCP化され手軽に出力できることで、営業部隊の意識改革ツールとして、ひいては受注拡大のためのクライアントへの提案ツールとして、MAXARTを活用できると期待している。また、リモートブルーフは将来的には全国にあ

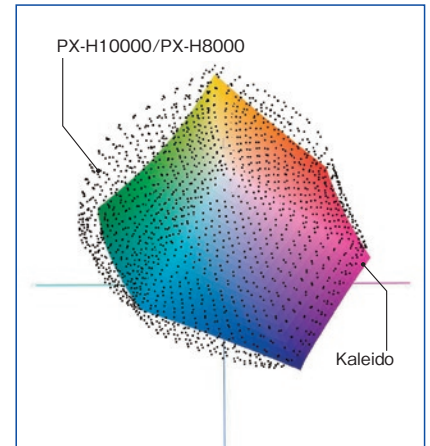


図: Kaleido インキとPX-Hシリーズのガマツト (gamut:色再現領域) 比較

る同社の約20拠点に設置し、色校正がどこでも出力できる仕組みを目指し、さらにすそ野を広げたクライアント内での運用も視野に入れている。歴代のMAXARTシリーズのユーザーとして、MAXARTのさらなる進化にも期待を寄せているのである。

進化を極めた高画質と高生産性

MAXART
マックスアート



PX-H10000
www.epson.jp/products/maxart/pxh10000



PX-H8000
www.epson.jp/products/maxart/pxh8000

マックスアートによる印刷ブルーフの最新事例やRIP情報など印刷業務に役立つ情報をお届け!!

ビジネス成功の秘訣はこちらから

ビジネスカ[↑]ipプロジェクト

●詳しくはエプソン販売株式会社 <http://maxart.jp>